

欧米在住ウイグル族の起居様式の変化を通じた床上文化の考察 —異なる住文化への環境移行に伴う住まい方の変容に関する研究—

A Study on The Dwelling Culture of Taking Off Outdoor Footwear Through Changing of Seating Style of Uyghurs in Western

A study on the change of dwelling style in environmental transition to different dwelling culture

○ エゼズ マヒラ*¹, 梅本 舞子*²
Mayila AIZEZI, Maiko UMEMOTO

This study targets Uyghurs living in Western countries, grasps the actual situation of changes in dwelling styles due to environmental transition, and consider the factors, similarities, and differences with Japan.

With the transition to the environment, all examples mainly use the chair seating style. However, there are some examples of having private guest room and high floor style supa for Floor seating, which was not seen in Uyghurs. Somehow 3/4 incorporates the floor-seating style. This is thought to be due to the fact they continue to take off their outdoor footwear in Western.

キーワード：起居様式, 住まい方, 環境移行, ウイグル族

Keywords: Seating Style, Dwelling Style, Environmental Transition, Uyghur Tribe

1. はじめに

本研究は、伝統的にユカの上で寝起きする起居様式とされるウイグル族に着目し、ウイグル族の日本、あるいは欧米諸国での住まい方と拠点移動に伴う変化の解明を通して、ユカ座という起居様式の特性とその要因を明らかにしようとする一連の研究の一部である^{注1)}。

このうち本稿では、イス座が一般的とされる欧米諸国に在住するウイグル族を対象に、環境移行に伴う変化の実態を捉え、その要因や日本との類似・相違を考察することを目的としている。

1.1 研究の背景

国際化が進展し、異国で生活することが一般化する中、生活拠点の移動に伴い、住文化はいかにして継承されるのかが着目される。中でもユカ座は、かねてから日本の住様式の特性の1つとされてきたが、世界的にみると「アメリカ西海岸から中南米、南太平洋の島々から東南アジア、インド、アフリカ、オーストラリアなどヨーロッパを除く世界各国に流布していた」とされ²⁾、これら文化

圏との違いは判然としない。異なる文化圏のユカ座様式を比較し、日本を相対的に位置付けることが、日本の住様式の独自性の再発見につながると考える。

1.2 本研究の視点と方法

ユカ座を捉える上で、本研究が着目するのは、履物を脱ぐ行為である。日本のように住戸内の一部で下足を脱ぎ、床上では裸足^{注2)}で過ごすこともある文化を「床上文化」と定義し(図1)、ユカ座・イス座併用の起居様式との関係を考察する点を特徴としている。異なる起居様式の併存には、イス座導入前から継続する下足を脱ぐ行為が影響していると思われる、この点を分析に加えることで、住様式を正確に捉えることができると考えるためである。

	住戸内の一部で In the house	履床様式 Footwear style	起居様式 Seating style
床上文化 Culture of taking off outdoor footwear	① 下足を脱ぐ Take off outdoor footwear	裸足 Barefoot	ユカ座 Floor seating
	② 下足を脱ぐ Take off outdoor footwear	上足+裸足混合 Mixing barefoot and slippers	イス座・ユカ座併用 Use both
上下足の分離 Taking off outdoor footwear and putting on slippers	③ 下足を脱ぐ Take off outdoor footwear	上足 Slippers	イス座 Chair seating
	④ 下足を脱がない Don't take off outdoor footwear		イス座 Chair seating

図1 用語の定義

*1 フリーランス 博士 (工学)

*2 筑波技術大学産業技術学部 准教授・博士 (工学)

Freelance, Dr. Eng.

Asst. Prof., Faculty of Industrial Tech., Tsukuba Univ. of Tech., Dr. Eng.

1.3 既往研究と本研究の到達点

起居様式は、家具のあり方と密接な関係がある。そのため、日本については戦後の庶民住宅を対象に、家具の導入・保有状況との関係が研究されており^{注3)}、イス座が進行するも、ユカ座との併用、折衷化する状況が指摘されている。また、和室(畳室)やフローリング等、床面様式との関係についても、洋室化が進んだ1980年代から床の間付き和室(座敷)の激減が指摘される昨今まで、研究の蓄積は多く^{注4)}、床面様式が変化しても、ユカ座の起居様式は残っていることが指摘されている。

履床様式との関係については、本研究の手法と類似した高らの研究⁸⁾が興味深い。日本人のイス座への許容性に比べ、在日外国人のユカ座への許容性が低いという調査結果を示しており、下足を脱ぐことへの抵抗感等、履床様式の違いを背景とした床面に対する意識の違いが現れたものとして指摘している。

これらの成果を踏まえつつ、筆者らはこれまでに伝統的に同じ履床様式と起居様式を備える在日ウイグル族を対象に、環境移行に伴う変化の実態を捉えた¹⁾。その結果、行為の1/3においてウイグルとは異なる起居様式が選択されていること、ウイグルでも日本でもイス座・ユカ座の併用が見られることを示した。ここには、面積や部屋数という物理的制約のみでなく、子育てのし易さや愛着ある住様式の再現等、環境の快適性を追求する居住者の主体的な対応行動も見られること、この互換性は下足を脱ぐ履床様式が影響していることを指摘した。

1.4 ウイグル族の伝統的住様式

ウイグル族とは、農耕を経済基盤とするトルコ系民族であり、ほぼ全人口がイスラム教を信仰する。伝統的様式は庭とその周りに配された居室によって構成される中庭型住宅とされ、他のイスラム都市と同様、中庭に向かって庇/pishaywanが設けられ、これが回廊/galleryとして中庭に面している。加えてウイグル族の場合、回廊部に設けた高さ35~43cm程度の高床/supaや縁台/benchangで、家族の食事やくつろぎが行われるという特徴を持つ(図2)^{注5)}。

居室の床の高さにも2パターンあり、通路と差のない場合と、出入口に面する幅約1.5~2mを除く部分を高床supaとするケースがある。前者は客間/Mihmanhana、後者は家族の食事、くつろぎ、就寝等多目的に使われる。

そして居室、supa、benchangいずれにも絨毯が敷き詰められ、その上では下足を脱ぎ床上に座る、あるいは布団を敷いて寝るという、ユカ座、上下足分離を伝統的様式とする。

2. 調査の概要

2.1 調査の方法

調査対象は、欧米諸国で生活するウイグル族家族のうち、インタビューや間取り採取への協力が得られた12件である。対象者の欧米とウイグルでの住様式を捉えるために、「欧米での住まい方」と「ウイグルでの住まい方」の2種類から構成したインタビュー調査を組み立てた。



図2 ウイグル族の伝統的な住様式

対象者には電話にてインタビューを行い、事前に準備した設問について記録する形式で調査を行なった。内容は、対象者の現在の欧米、及びウイグルでの住まいにおける家族構成と住まい方、起居様式、履床様式である。調査は2019年5月から8月までの3ヶ月間に実施した。

2.2 対象世帯の基本属性

対象はいずれも親と子からなる世帯であり、回答者は②を除いて全て妻である。妻の年齢は50代1件、40代7名、30代以下4件であり、調査時の家族構成は、夫婦のみ⑦、母子⑩、残り10件は夫婦と子である(表1)。就業状況は夫婦共働き5世帯、夫就業・妻主婦業6世帯、大学院生1世帯である。なお、⑩⑪は姉妹である。

現在の在住国は3カ国あり、アメリカ7件、カナダ3件、オーストラリア2件である。このうち、一戸建ての持ち家が8世帯、残り4世帯は集合住宅の賃借である。

一方、移動前のウイグルでの住まいについて、12件中7件(①②③⑤⑥⑨⑫)は、現在の配偶者と婚姻後の住まいであるが、残り5件は結婚前の住まいであり、回答者の実家である。全て持ち家であり、伝統的な中庭型の戸建て住宅1例⑧を除く11事例は集合住宅である。

3. 起居様式の実態と環境移行に伴う変化

ウイグルと欧米、各々での起居様式について、食事E、くつろぎR、客の応対H、家族の就寝Sの行為別に尋ねた。併せてその居室を間取り図上で確認すると共に、家具を間取り図に記録した。イス座家具としては、ダイニングテーブル、ソファーセット、ベッド、ユカ座家具としては座卓、ウイグル式座布団が確認できている。

なお、欧米の間取り図と家具の配置は、対象者に送ってもらった写真やビデオに基づいて、筆者が記録をとったものである。一方、ウイグルでの間取り図は、部屋の数と出入り口の位置を正確に記すことをお願いした上で、対象者自身にスケッチをしてもらい、そのスケッチに、インタビュー調査に基づいて筆者が家具を配したものである。全12件中11件から、インタビューと間取り採取両方への協力を得られ、⑫についてはインタビュー項目のみ回答を得られている(図3)。

3.1 環境移行前後の住空間の特性

1) ウイグルでの住空間

11件の集合住宅について、延床面積は最小56㎡、最大130㎡とひらきがある。

空間構成には2点の特徴が見られ、1つは、キッチンが独立して設けられている点である。全ての事例がこのタイプであり、台所で食事をする住まい方は⑦のみであった。もう1つは、居室の床面の高さである。伝統的住宅と同様に出入り口以外の部分を高床にしている居室があり、中庭型である⑧の他、集合住宅4件(①④⑩⑪)が該当する。

2) 欧米諸国での住空間

12件中4件は集合住宅の賃借、残りは全て一戸建ての持ち家である。延床面積は最小110㎡、最大306㎡であり、相対的に持ち家一戸建ての方が広い。また、ウイグル、欧米両方の延床面積のわかる8事例全てにおいて、環境移行後の欧米の方が、広がっていることがわかる。

空間構成については、アメリカの事例①～⑦について特徴が見られる。まず、Diningが2箇所設けられている

表1 調査対象者の概要

No	家族構成 (欧米)※1	職業		居住年	都市・国		住宅タイプ※2		住宅の所有形態		住戸面積	
		夫	妻		ウイグル / 欧米	ウイグル / 欧米	ウイグル / 欧米	ウイグル / 欧米	ウイグル / 欧米	ウイグル / 欧米		
①	M58, (F42), f22, f11, f7	会社員	幼先生	8年	Chochek	U.S.A	A	B	持ち家	持ち家	90㎡	287㎡
②	(M59), F58, m17	会社員	看護師	3年	Urunchi	U.S.A	A	B	持ち家	持ち家	56㎡	306㎡
③	M53 (F45), f13, m11, f9, m6	会社員	主婦	4年	Urunchi	U.S.A	A	B	持ち家	持ち家	80㎡	409㎡
④	M41, (F47), f13, f10, f8	研究員	薬剤師	2年	Korla	U.S.A	A	B	持ち家	持ち家	85㎡	297㎡
⑤	M47, (F47), m23, m20	会社員	主婦	3ヶ月	Kashgar	U.S.A	A	B	持ち家	持ち家	85㎡	214㎡
⑥	M47, (F46), m20	会社員	主婦	2年	Kashgar	U.S.A	A	A	持ち家	賃借	65㎡	110㎡
⑦	M29, (F29)	会社員	会社員	5ヶ月	Urunchi	U.S.A	A	A	持ち家	賃借	100㎡	110㎡
⑧	M47, (F43), f20, f10, f8, f4	会社員	体操コーチ	6年	Turpan	Canada	B'	B	持ち家	持ち家	NA	NA
⑨	M42, (F38), m7, f5, m0	会社員	主婦	2年	Urunchi	Canada	A	B	持ち家	持ち家	90㎡	250㎡
⑩	M38, (F39), f4, m2	自営	主婦	4年	Urunchi	Australia	A	A	持ち家	賃借	130㎡	NA
⑪	(F34), m4 ※⑩と⑪は姉妹	—	学生	2年	Urunchi	Australia	A	A	持ち家	賃借	130㎡	NA
⑫	M48, (F45), f23, m20, f15, m6	ビジネス	主婦	4年	Urunchi	Canada	A	B	持ち家	持ち家	100㎡	NA

※1 M:夫 F:妻 m:息子 f:娘 ()対象者

※2 A:集合住宅 B:戸建て住宅 B':戸建て中庭住

No Area in Uyghur / Area in western

Age M husband F wife
Age occupation
child
Age f Age

< Daily activities >
 E : Meal
 R : Relaxation
 H : Hospitality
 S : Sleep
 Sg : Sleep(for guest)

Floor plan in Uyghur (The upper right)
 Floor plan in Western (The middle)
 All is different scale, no scale bar

▲ Entrance ■ Uyghur carpet (gilem)

< About rooms >
 L : Livingroom
 D : Diningroom
 K : Kitchen
 B : Master bedroom
 b : Child's bedroom

< Furniture ect>
 DT : Dining table
 LT : Low table(not display
 In case of sofa set)
 FT : Uyghur style zabuton
 HF : High floor style

① 90m² / 287m²

M⁵⁸ Office worker
F⁴² Kinder garden teacher
f²² f¹¹ f⁷

② 56m² / 306m²

M⁵⁹ Office worker
F⁵⁸ nurse
m¹⁷

③ 80m² / 409m²

M⁵³ Office worker
F⁴⁵ Housewife
f¹³ m¹¹ f⁹ m⁶

④ 85m² / 297m²

M⁴⁷ Reseachter
F⁴⁷ Pharmacist
f¹³ f¹⁰ f⁸

⑤ 85m² / 214m²

M⁴⁷ Office worker
F⁴⁷ Housewife
m²³ m²⁰

図3 平面構成と住まい方 (事例①~⑤)



図3 (続き) 平面構成と住まい方 (事例⑥~⑪)

点であり、延床面積 200 m²以上の①～⑤がこれに該当する。台所近くの Dining は、Breakfast Area と呼称されており、気軽な朝食を想定したものである。一方、玄関近くに設けられた Dining は、Formal Dining としてゆったりした食事や来客時に使われるのが一般的であるという。さらに事例①、②では、Living も、Formal Living と、Family Living の 2 種類があることが特徴として指摘できる。

3.2 行為別の起居様式とその変化

各々の起居様式について、図 4～7 に示すよう、ウイグルと欧米での起居様式がイス座なのかユカ座なのかの 2 軸の組み合わせで、A, B, C, D の 4 象限に分け、環境移行

に伴う変化を捉えた。さらにその中でも、朝と夜、あるいは季節によって起居様式を使い分けており、イス座とユカ座を併用している例は、各象限の内側に、時々ユカ座/Sometimes Floor Seating in Uyghur 等と再掲している。以下では行為別に、特徴と理由を捉える。

1) 食事 E (図 4)

ウイグルでの食事について、全 12 件中 8 件がイス座である。ダイニングテーブルの使用は 6 件、ソファセットやダイニングテーブル併用は④のみであった。また⑦は、夕食や土日のゆっくりした食事の際には、テレビの前でユカ座の食事をしており、ソファはあるが、それは使わず床に座している例である。一方、食事をユカ

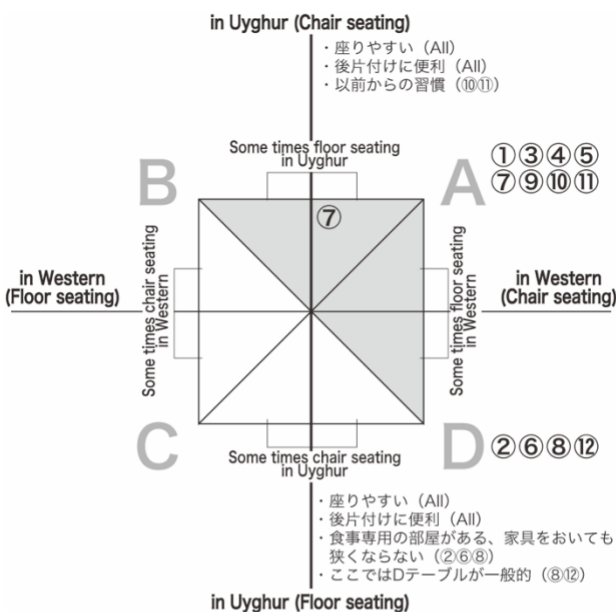


図 4 ウイグル・欧米での「食事 E」の起居様式

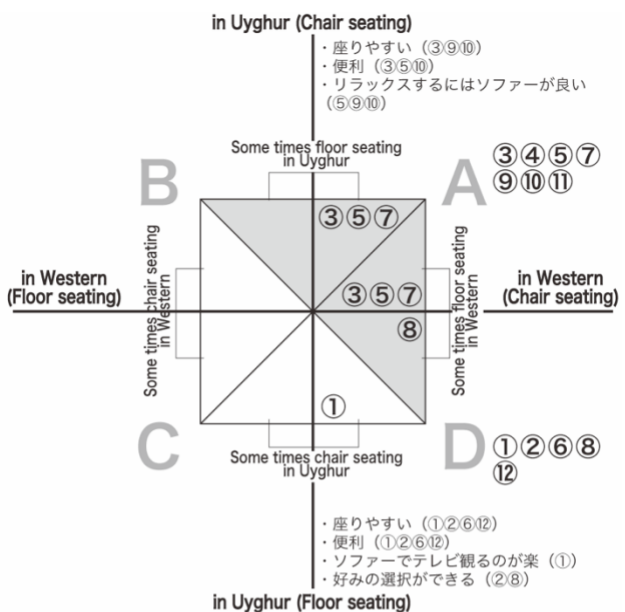


図 5 ウイグル・欧米での「つつろぎ R」の起居様式

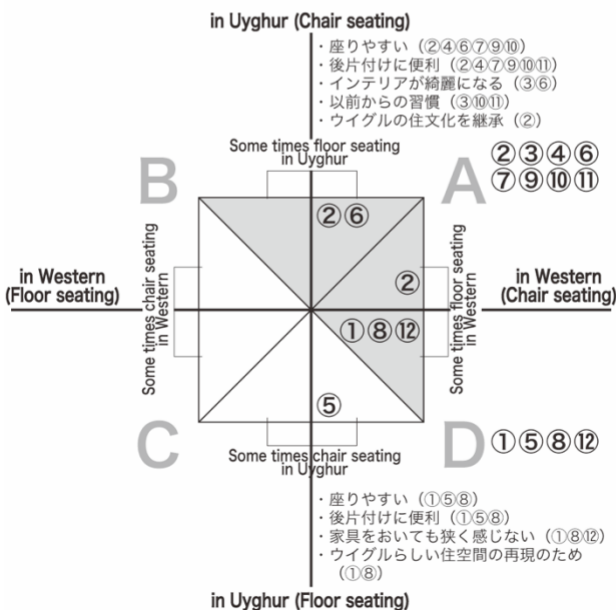


図 6 ウイグル・欧米での「客の応対 H」の起居様式

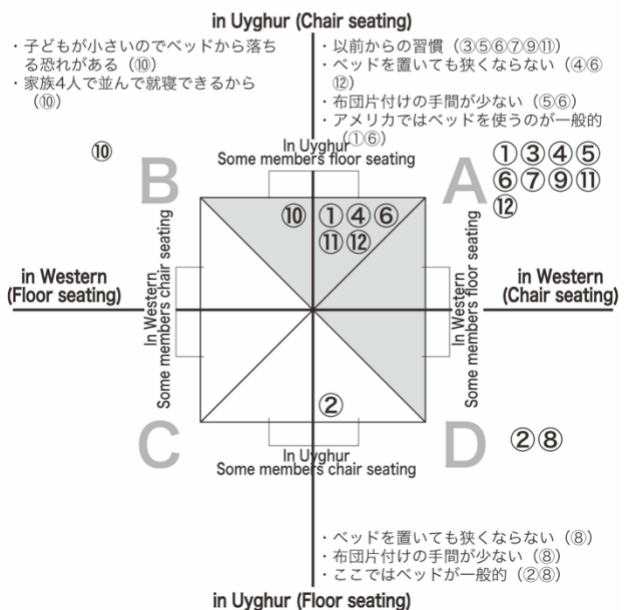


図 7 ウイグル・欧米での「家族の就寝 S」の起居様式

座によって行うのは、伝統的中庭型の⑧のほか、②⑥⑫である。後者3件はいずれもリビング機能を有する部屋で座卓による食事を行うものである。一方⑧は、冬場は居室内でユカの上の絨毯に更にクロスを広げた食事様式、夏は中庭に設けた可動式の木製高床/benchangの上で食事という、季節による変化のある例である。

欧米での食事は全てイス座であり、先述の breakfast area のダイニングテーブルにて食事を行なっている。このうち8件(①③④⑤⑦⑨⑩⑪)はウイグルでのイス座を継続するタイプAであり、4件(②⑥⑧⑫)はユカ座からイス座へ変化させたタイプDに位置付けられる。継続するAの理由としては、「以前からの習慣」のほか、「座り易さ」や「後片付けのし易さ」が挙げられた。一方、変化させたDでは、同様の理由の他、「専用の食事室があるため、家具を置いても狭くならない」等、居室数や居室面積に関する理由、「ここではダイニングテーブルが一般的」など、在住先の住文化へ適応させようとする声も聞かれた。

2) くつろぎR (図5)

ウイグルでのくつろぎRでは、主にイス座7件(③④⑤⑦⑨⑩⑪)、主にユカ座5件(①②⑥⑧⑫)である。イス座7件については、全てソファーセットを用いている。ただしこのうち③⑦はソファーセットの前で、⑤はダイニングテーブル脇やユカ座のしつらえとした客室にて、時々ユカ座のくつろぎをする、という例である。一方、主にユカ座の5件のうち、①を除く②⑥⑧⑫は、リビングの機能を有する部屋にてくつろぎの他に食事、就寝にも兼用している。一方、①はユカ座にしつらえた客間や benchang によって高床とした部屋で主にくつろぎ、時々ダイニングテーブルのイス座でくつろぐ例である。

環境移行に伴う変化を捉えると、欧米では全てが主にイス座でくつろいでいる。このうち、ウイグルからイス座を継続するタイプAは7件(③④⑤⑦⑨⑩⑪)、ユカ座からイス座に変化させたタイプDは5件(①②⑥⑧⑫)である。タイプAとD共通する理由としては、便利、座りやすい、テレビを観るのにソファーが良いなどの理由が聞かれた。ただ、中には時々ユカ座でくつろぐという例も4件(③⑤⑦⑧)も見られ、いずれもウイグルでユカ座のくつろぎをしていた例である。このうち⑧はウイグル式座布団を置き、ユカ座用にしつらえた部屋でくつろぐという。一方、③⑤⑦については、イス座家具であるソファーのある部屋で、ソファーに座らずユカの上に座ってくつろぐこともある、という例である。

3) 客の対応H (図6)

ウイグルでの客の対応Hは、主にイス座が8件(②③④⑥⑦⑨⑩⑪)、主にユカ座は4件(①⑤⑧⑫)である。主にイス座の8件のうち、②⑥は人数が多い場合には床座も併用するという例であり、いずれもユカ座にしつらえ、食事・くつろぎ・就寝に用いている別の部屋を用いている。一方、主にユカ座の4件について、⑫は面積の制約を理由としているが、残り3件は、伝統的な規範を重視し、ユカ座としている例である。具体的には座卓とウイグル式長座布団、あるいは絨毯の上にクロスを広げる伝統的スタイルにて、客の対応を行なっている。

欧米では、全事例が主にイス座で客の対応を行なっている。従って、ウイグルでもイス座であった8件が継続するタイプA、ウイグルではユカ座であった4件はイス座へ変化させたタイプDである。AとDに共通する理由は、「座り易さ」、「後片付けのし易さ」であり、食事EやくつろぎRと同様であった。加えて、「部屋数や面積に余裕があると家具を置いても狭く感じない」、「インテリアが綺麗になる」、との理由も聞かれた。

ただし、①②⑧⑫はユカ座の専用客間をしつらえており、人数が多い時や、客の就寝Sg時にはこちらを用いる例である。ウイグル式の座布団や座卓をしつらえ、4件いずれもウイグルでの生活を継続していると言える。

4) 家族の就寝S (図7)

2.2の通り、ウイグルの事例には結婚後の事例もあれば、結婚前の実家での住まい方を示す例もある。そこで、回答者本人の就寝がどうであったかを軸に分類を試みた。

ウイグルでは、回答者を含む家族全員ベッドは4件(③⑤⑦⑨)、家族全員布団は1件⑧、残り7件は家族成員によってベッドか布団かが異なる例である。布団利用によるユカ座は計8件となり、4行為の中では最もユカ座採用率が高いことが指摘できる。加えて布団利用に特徴的なのは、高床 benchang での就寝5件(①④⑧⑩⑪)であり、ベッド使用の場合には見られない。

一方、欧米での布団使用は⑩のみであり、他は全ての家族成員がベッド就寝をしている。そのため、環境移行に伴う変化を捉えると、ウイグルからベッドのみの生活を継続するタイプが4件(③⑤⑦⑨)、布団とベッド混合からベッドのみに変化させたタイプが7件(①②④⑥⑧⑩⑫)、そして布団ベッド混合から布団のみに変化させた⑩に分けられる。ベッドのみに変化させた11件では、「以前からの習慣」の他、「ベッドを置いても狭くならない」という面積規模、「片付けの手間を省くことができる」

という利便性、そして「ここではベッドが一般的である」という異国への適合性を示す理由が挙げられた。なお、布団就寝の⑩はマットレスをそのまま床に敷いて寝ている例であり、「子どもが小さいから家族 4 人で一緒に寝るため」を理由として回答している。

3.3 居室別の起居様式と行為の関係

この他にも、ユカ座による行為が見られる。地下室に高床 supa をしつらえ、ここを子どもの遊びや趣味に使う例であり、③⑫の 2 件が該当している (写真 1)。

以上を踏まえて居室別に起居様式を整理し、ユカ座のみなのか、併用なのか、イス座のみなのか、さらにユカ座に用いられる行為が何なのかを捉え直した (図 8)。

その結果、ユカ座のみに用いる居室のある例がウイグル 9 件・欧米 6 件、ユカ座のみは無いがイス座と併用する居室のある例がウイグル 1 件・欧米 3 件、イス座のみの居室がウイグル 2 件・欧米 3 件となった。ウイグルと欧米両国ともユカ座を用いない例は見られない。

ユカ座のみに用いる居室について、環境移行前後を比較する。欧米でこのタイプに該当する 6 件中 5 件は、ウイグルでも同様にユカ座のみの居室を備えていた例である。ただしその行為はウイグルと欧米とで異なり、ウイ

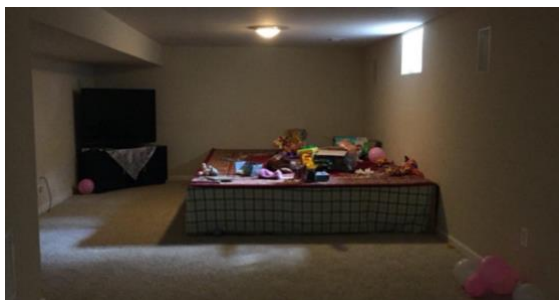


写真 1 地下室に設けられた supa, gilem が敷かれている (事例③)

グルでは食事 E や就寝 S と重なっていたのに対し、欧米では接客 H や客の就寝 Sg という来客専用 (⑫②⑧①)、あるいはくつろぎ R 専用 (⑧) として確保されている。

さらに、欧米でユカ座・イス座を併用する例 (⑤⑦) についても、ウイグルで見られた食事 E との重なりが解消され、くつろぎ R と接客 H のみとなっている。

図 8 に示す通り、事例の多くは環境移行に伴い住戸面積が拡大している。この点を踏まえると、面積に余裕ができることで、潜在化していた接客 H やくつろぎ R 専用のユカ座空間への住要求が、顕在化したものと解釈される。ウイグルではイス座のみであったものの、欧米では supa を設けた③や、イス座と併用ではあるもののユカ座による接客 H やくつろぎ R が行われる⑨も、この点を裏付ける例であると考えられる。

4. 履床様式・敷物と起居様式の関係

4.1 履物を脱ぐ行為とその場所

1.4 の通り、ウイグル族は伝統的に敷物の上では履物を脱ぐ履床様式をとっており、現代都市の集合住宅でも室内では下足を脱ぐことが一般的であるとされる^{11) 15)}。これらが今回の調査対象にも該当するか否かを捉えた。

まずウイグルでは、集合住宅 11 事例全てが、住戸入り口で下足を脱いでいることがわかった。また中庭型の⑧については、敷物がある場合にその上では必ず下足を脱いだ状態で過ごしていることが聞かれた。

これらの行為は欧米でも継続されており、全 12 例が、住戸入り口で下足を脱いでいることが確認された。写真にて確認を行った結果、入り口に玄関マットや絨毯を敷き、下足を脱ぐ場所を設定する行為が見られた (写真 2)。

4.2 欧米での敷物の実態と起居様式の関係

床面のしつらえについて聞き取りと写真による確認調査を行った。その結果、床面の素材や起居様式にかかわらず、居室に絨毯/gilem が敷かれていることがわかった。

1) 敷く場所との関係

アメリカでは、床仕上げとして居室全体にカーペットが敷き詰められている例が一般的であり、アメリカの 7

		in Western		
		ユカ座のみあり	ユカ・イス併用あり	イス座のみ
in Uyghur	ユカ座のみあり	⑫ 100㎡ ERHS NA H/Supa	⑤ 85㎡ ERH/RH 214㎡ RH/R	⑥ 65㎡ ERHS 110㎡ 無し
		② 56㎡ ERHS 306㎡ HSg		④ 85㎡ SSg 297㎡ 無し
		⑧ NA ERS/RHS/H NA HSg/R		⑪ 130㎡ SSg NA 無し
		① 90㎡ RH/RSSg/S 287㎡ HSg/Sg		
ユカ・イス併用あり			⑦ 100㎡ ERH 110㎡ RH	
	イス座のみ	③ 80㎡ 無し 409㎡ R/Supa	⑨ 90㎡ 無し 250㎡ RHSg	

Sample No.
(No) aream Style in Uyghur
aream Style in Western

<行為> E:食事
R:くつろぎ
H:客の応対
S:家族の就寝
Sg:客の就寝

<起居様式>
RH... ユカ座のみの居室
RH... ユカ座とイス座併用の居室

図 8 ウイグル・欧米での居室別の起居様式と行為

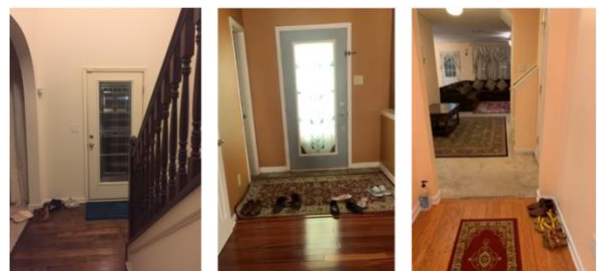


写真 2 欧米での住戸入り口の様子

事例のうち③を除く 6 事例で、殆どの居室にカーペットが敷き詰められている。しかし、その場合もカーペットの上にさらに gilem を敷き、床面をしつらえている状況が確認された。カナダやオーストラリアの事例では、フローリングやタイル床が多いが、この場合も同様に gilem が多くの居室で確認された。

居室別に捉えると、まず Living には全事例で絨毯/gilem が敷かれている (表 2)。その次に事例数が多いのは Dining であり、⑥⑩⑪以外の 9 事例で確認でき、いずれもソファセットやダイニングテーブルなどイス座家具の下に敷かれている。寝室については、主寝室に 6 事例、子供部屋に 4 事例見られた。中でも①③⑧⑫は全ての寝室に敷かれており、一方で主寝室のみの 3 事例②⑥⑨も見られた。これら寝室の場合には、ベッドの手前や脇など居室の一部に敷かれていることが確認できた。

さらに、廊下 5 事例①⑦⑧⑨⑩、出入り口 5 事例①②③④⑧も認められる。

つまり、起居様式に関係なく、居室の床面を gilem でしつらえる傾向が極めて高いことが指摘できる。中でも 4 事例①③⑧⑫は全ての部屋に絨毯を敷いていた。

2) 敷物の種類と敷き方の関係

敷物として確認できたのは、gilem のみである。在日ウイグル族の日本での住まいには gilem 以外の敷物も見られたが¹⁾、今回の調査では確認されなかった。

gilem を敷く理由として、「敷く習慣がある」、「インテリアが綺麗に、またウイグルらしくなる」、「タイル床を隠すことができる」などが挙げられた。中には、ウイグルから gilem を持参した例も 2 件⑧⑨確認された。

さらに、壁掛け式の gilem も 3 件で確認され、②では客間に、⑤⑧には Living の壁にかけられている。

なお、在日ウイグル族の日本の住まいでは、居室全体に敷物を敷き詰める様式が認められたが¹⁾、今回の調査では見られず、全事例が居室の一部を gilem で覆っている形であった。

表 2 欧米で絨毯 Gilem を敷く居室と床仕上げとの関係

Room Floor material	Entrance	Hall	Chair-style Guest room	Living	Dining	Kitchen	Master Bedroom	Child's Bedroom
Carpet		⑦	①②⑤	①②③ ⑤⑥⑦	①⑦	③⑨⑫	①②⑨	⑥
Wood Flooring	①③④	①⑧	④	④⑧⑩ ⑫	④⑤⑧		③⑧⑫	③⑧⑫
Tile	②⑧	⑨⑪		⑨⑪	③⑨			
No Gilem	7	7	1	0	5	9	6	8

5. まとめと考察

5.1 本調査のまとめ

欧米在住のウイグル族 12 世帯を対象に、環境移行に

伴う起居様式の変化を捉え、次の事項を明らかにした。

- 1) 欧米への環境移行後は、食事、くつろぎ、客の対応いずれにおいても、全事例が主たる起居様式としてイス座を選択しており、中でも食事にその傾向がより顕著である。一方、くつろぎと客の対応では、各々 1/3 ずつ、欧米においても時々ユカ座を用いている。
- 2) 居室単位でユカ座の有無を捉え直すと、欧米への環境移行後でも、ユカ座のみに用いる居室のある例が半数に見られる。欧米ではウイグルにはなかった専用客間を持つ例が見られ、ウイグル式座布団や gilem のしつらえが確認された。また居室の一部を高床にした supa も 2 件見られ、住戸規模の拡大が、接客等行為専用のユカ座空間確保の住要求を顕在化させていようことを指摘した。
- 3) 一方、ソファというイス座家具をしつらえた部屋であっても、ユカ上で「リラックスする」、「ゴロゴロする」という例 3 件、来客の宿泊時には布団を敷く例が 2 件認められた。
- 4) 履床様式について、伝統的中庭型の例を除く 11 事例が、ウイグルの集合住宅入り口では下足を脱いでいること、欧米への環境移行後は、全事例が住戸入口で下足を脱いでいることが確認できた。
- 5) 下足を脱いで過ごす空間は敷物で覆うことがウイグルの伝統文化とされるが、欧米においてもウイグルの伝統的敷物である絨毯 gilem が全事例で敷かれていることが確認できた。起居様式や床仕上げとの因果関係も認められない。
- 6) さらに、壁かけ式の絨毯も 3 例に見られ、来客の対応に用いる部屋であることが共通事項として指摘できる。

5.2 環境移行に伴う起居様式の変化についての考察

1) 欧米在住ウイグル族におけるユカ座の継承とその特徴

欧米在住者を対象とした今回の調査では、環境移行に伴い、全ての行為において、主にイス座による生活が展開されている。イス座家具を置いても狭くならないという面積的制約からの開放も手伝い、積極的に採用しやすいと思われるが、「ここ (滞在先) ではこれが一般的」という、異国の住様式に適應させる側面も見られた。

一方で、ウイグルの住まいには見られなかったユカ座の専用客間やくつろぎ部屋を設ける、あるいは高床のユカ座 supa のある居室を別途設けるという例を確認できた。いずれも欧米への環境移行に伴い住戸面積が拡大した例であり、異国での生活に加え、住戸面積が拡大する

ことで、むしろ帰属的側面が顕在化したと解釈される。

住戸面積が拡大すると、ユカ座専用室を備える例が増える点は、日本における和室や座敷（床の間付き和室）の設置率の共通点として指摘できる^{注6)}。ただし、そこで展開されている現代のウイグル族の接客行為の詳細（対応の相手やその頻度、もてなし方等）は明らかにできていない。現代の日本のように、接客を想定しながらも、実際は接客としては殆ど使われず、日常の家事や子の遊び、家族の就寝等のケの空間となっているのか^{注7)}、あるいはそうではなく現代も接客専用に使われており、また日本の伝統的な接客行為のように非日常で儀礼的なハレの要素が強いのか等の検証が必要である。

なお、子の遊びや趣味室等、日常的なケの空間として、1居室内の床を一部高くする supa を別途設ける行為が、ウイグル特有のものなのかどうか判然としない。リビングに畳コーナーとして高床部分を設ける日本のそれとは位置付けが異なりそうであり、本件についても継続して検証が必要である。

2) 起居様式の変化と床上文化の関係について

イス座家具で設えた部屋であっても床上でくつろぐ事例があること、また多くの部屋をイス座家具でしつらえながらもユカ座専用室を別途確保できていること、つまりユカ座とイス座を併用できているのは、住戸入口で下足を脱ぐ行為が、欧米でも継続されているためだといえよう。

そしてこの履き替えが、環境移行後の欧米でも継続されている一要素として、ウイグル族の場合は絨毯/gilem を敷くことを指摘できそうである。在日ウイグル族を対象とした先行研究¹⁾でも、今回の調査でも、起居様式や床仕上げに関わらず、全ての事例に認められた gilem は、ウイグル族にとって、単なる装飾の域を超えた、異国でのアイデンティティを再構成する重要な要素と位置付けられよう。

5.3 終わりに

限られたサンプルでのケーススタディーであるため、考察の一般化にはさらなる検証が必要であるが、下足を脱いだユカ上での生活には、イス座・ユカ座が互換性を持って併存しやすいことは、共通事項として指摘できそうである。

他方でウイグル族特有の gilem や supa には、日本とは異なる住居観が反映されていそうであり、伝統的な住空間構成の違い（ウイグルは中庭型、日本は外庭型）の影響も加えながら、引き続き検証を進めたい。

注

注 1) 先行して日本在住のウイグル族を対象に同様の手法を用いた研究を実施している。文献 1) 参照。

注 2) 本稿での「裸足」とは、履物を履かない状態を指し、素足だけではなく肌着に相当する足袋や靴下等を着けた状態を含むものとする。

注 3) 代表的な研究として文献 3)、4) が挙げられる。

注 4) 代表的な研究として文献 5)、6)、7) が挙げられる。

注 5) 図 2 の HouseA は筆者が 2016 年にカシュガルにて調査した事例であり（文献 9) 参照）、文献 10) ~14) において指摘される、ウイグル族の伝統的住宅としての特色を備えている。

注 6) 文献 16) の第八章、鈴木義弘による「和室の現象学」pp.282-283 参照。2000 年以降の分譲戸建て住宅の平面構成において、住戸面積の上昇に伴い、和室や床の間の設置率が上昇する傾向が示されている。

注 7) 拙稿の文献 17) において、この点を明らかにしている。

参考文献

- 1) エゼズマヒラ、梅本舞子、豊川斎赫、小林秀樹：在日ウイグル族の起居様式の変化を通じた床上文化の考察—異なる住文化への環境移行に伴う住まい方の変容に関する研究、日本建築学会計画系論文集、第 767 号、pp.11-21, 2020.1
- 2) 矢田部英正：坐の文明論、晶文社、2018.6
- 3) 西山卯三：これからの住まい、相模書房、1947.9
- 4) 沢田知子：集合住宅の公室における日常・非日常生活の展開について 起居様式の動向及び行動拠点の構成から見た行動環境としての住居の考察 その 1、日本建築学会計画系論文集、第 511 号、pp.83-90, 1998.9
- 5) 今井範子：住様式からみた住宅平面に関する研究、京都大学博士論文、1986.5
- 6) 竹田喜美子ほか：公室空間における起居様式の傾向—輸入住宅における住まい方に関する研究 その 2—、日本建築学会計画系論文集、第 542 号、pp.105-112, 2001.4
- 7) 高岡大輔、鈴木義弘ほか：LD 空間と和室のしつらえからみた起居様式と和室のプラン選好について 現代住宅における平面構成の変容に関する研究第 9 報、日本建築学会九州支部研究報告、第 52 号、pp.149-152, 2013.3
- 8) 高凱ほか：住居環境と生活姿勢との関係に関する研究—異なる文化圏における起居様式の比較・分析—、日本建築学会近畿支部研究報告集、38、pp.65-68, 1998.5
- 9) Mayila Aizezi ほか：カシュガル市中庭型住宅の空間構成と使われ方について、日本建築学会大会学術講演梗概集、E-1、pp.1053-1054, 2017.7
- 10) 陣内秀信ほか：イスラーム世界の都市空間、法政大学出版局、2002.11
- 11) 岩崎雅美編：中国・シルクロードの女性と生活、東方出版、2004.8.26
- 12) 岩崎雅美編：ウイグル女性の家族と生活、東方出版、2006.11.28
- 13) 熊谷瑞恵：食と住空間にみるウイグル族の文化—中国新疆に息づく暮らしの場、昭和堂、2011.5
- 14) Taoin ほか：カシュガル旧市街地における住空間的特徴に関する研究、Huazhong 建築、p.132, 2012.10
- 15) 楊園園：新疆ウイグル族伝統的民家の居室の内装について、p.1, 2014
- 16) 松村秀一、服部峯生編：和室学—世界で日本にしかない空間、平凡社、2020.10
- 17) 切原舞子、鈴木義弘、岡俊江：現代独立住宅における座敷の使われ方と存在意義について 現代における住宅計画のための室要求構造の解明に関する研究 その 2、日本建築学会計画系論文集、第 643 号、pp.1951-1960, 2009.9